

4 調査結果について

(1) 天候等の昔の呼び方の調査結果

① 太陽

1) 太陽（一般）

ア 採録した呼び方

- ・ オテントサン（：お天道さん）、オヒサン、オヒーサン（：お日さん）、ニチリン、ニチリンサン（：日輪さん）

イ 呼び方とその状況

太陽の呼び方としては、「オヒサン」や「オテントサン」をはじめ計5種を採録した。

郡内全域で主として「オヒサン」又は「オヒーサン」と呼ばれたほか、当時の高齢女性を中心として「オテントサン」とも呼ばれ、集落や人によっては「オヒサン」と同様によく使われたという話がみられた。

また、「ニチリンサン」もほぼ全域で採録したが、当時、一部の高齢女性が使い、よく使われた呼び方ではなかったという。

なお、隣接地域として調査を行った土山町山女原（旧甲賀郡）では「ダイニチサン」を採録した。

ウ その他

聴き取りから、当時の高齢者はよく太陽を拝んでいたという話が数多く聞かれた。

なお、人や場合によっては語尾を「サマ」とし、「オヒサマ」、「オテントサマ」、「ニチリンサマ」等と呼ぶ場合もあったようであるが、ここでは語尾を「サン」でまとめた。



2) 夕方の太陽

ア 採録した呼び方

- ・ 山に入る太陽 イリヒ（：入り日）、オチビ（：落ち日）
- ・ 形状 サンダワラ（：棧俵）
- ・ 一般 ユウヒ（：夕日）

イ 呼び方とその状況

夕方の（沈みゆく）太陽の呼び方としては、「ユウヒ」や「イリヒ」をはじめ計4種を採録した。

郡内全域で一般的な「ユウヒ」とともに、日が西の山に入っていくことから「イリヒ」と呼ばれたほか、夕方となると雲の状況によっては太陽の光が放射状に見え、それが米俵に蓋をすするために用いた棧俵（さんだわら）に似ていると考えられたことから広く「サンダワラ」とも呼ばれた。

農作業をしていて夕暮れとなり「サンダワラが沈んだのでそろそろ帰ろう」等と主として当時の男性高齢者が時折使っていたという。

3) 夕焼け

ア 採録した呼び方

- ・ 赤い色から アカネ (:茜)、アカネサス (:茜さす)、アカネホス (:茜ほす)
- ・ 一般 ユウヤケ (:夕焼け)

※ 天候に関する伝承・諺の調査で採録した呼び方

○ 夕焼け

- ・ イリヒガイイ (:入り日が良い)

○ 朝焼け

- ・ アカネサス (:茜さす)
- ・ アサアカネ (:朝茜)
- ・ アサヒノコガレ (:朝日の焦がれ)
- ・ アサヤケ (:朝焼け)
- ・ オキガアカルイ (:沖が明るい)
- ・ ハヤイアカネ (:早い茜)
- ・ ヒガシガコガレル (:東が焦がれる)
- ・ ヒガシニッコリ (:東にっこり)
- ・ ヒガシノソラガアカルイ (:東の空が明るい)

イ 呼び方とその状況

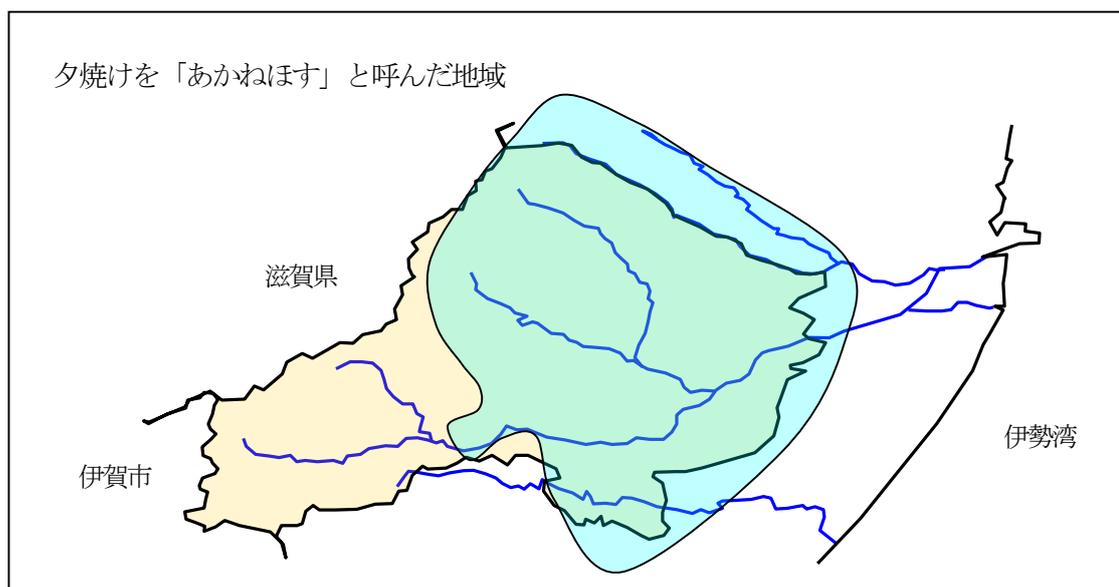
夕焼けの呼び方としては、「ユウヤケ」や「アカネホス」をはじめ計4種を採録した。

郡内全域で一般的な「ユウヤケ」と呼ばれたほか、加太地区や坂下地区を除く広い地域で「アカネホス」とも呼ばれ、また、集落や人によっては「アカネサス」と呼ぶ場合もみられた。

ウ その他

併せて行った天候に関する伝承・諺の調査において、「夕焼けになると(明日は)天気」、「入り日が良いと天気、悪いと雨」等、夕焼けと好天気の関係を示す伝承等を郡内全域で採録した。

また、朝焼けに関して、「アサアカネ」、「ヒガシニッコリ」等の呼び方とともに、「朝焼けは雨」等、天気が崩れることを示す伝承等も全域で採録した。



4) 日差し

ア 採録した呼び方

- ・ オテリ (:お照り)、オテリサン (:お照りさん)、テリ (:照り)

イ 呼び方とその状況

日差しの呼び方としては、「テリ」や「オテリ」をはじめ計3種を採録した。

郡内全域で「テリ」、「オテリ」と呼ばれたほか、郡の東部から北部を中心に「オテリサン」とも呼ばれる傾向が見られた。

なお、こうした呼び方は場合によっては太陽そのものをさす場合もあったようである。

② 風

1) 東風

ア 採録した呼び方

- ・ 海側から来る風
ウミカゼ (:海風)、オキカゼ (:沖風)、ナミカゼ
- ・ 西風に対し
ウラガエシ (:裏返し)、ウラカゼ (:裏風)
- ・ その他
コチ



イ 呼び方とその状況

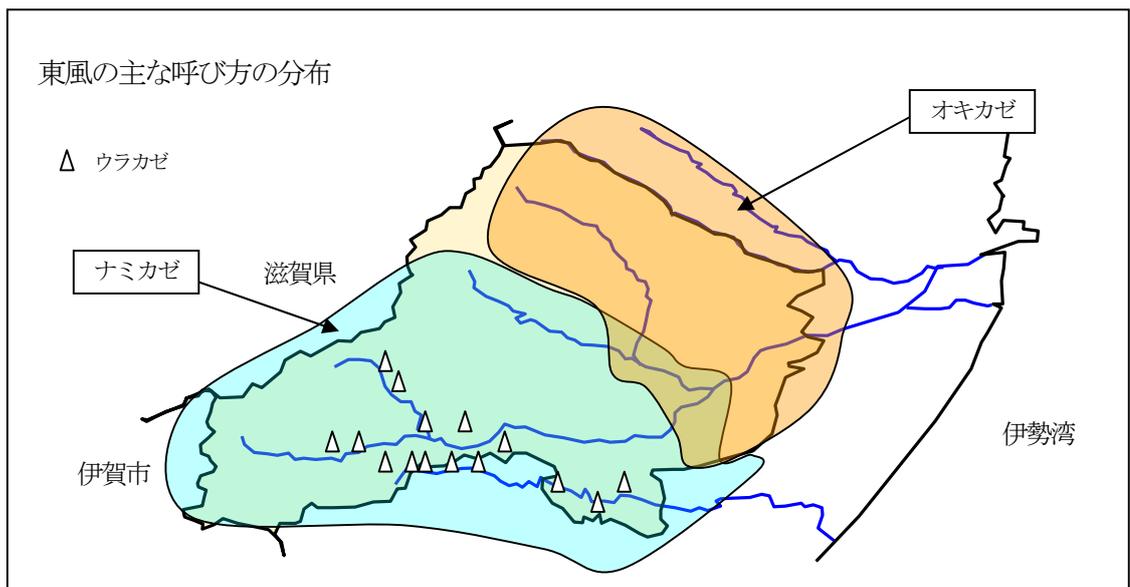
東風の呼び方としては、「オキカゼ」や「ナミカゼ」をはじめ計6種を採録した。

郡の東西で呼び方が大きく分かれ、井田川地区から川崎地区付近を境として、東部から北部にかけての地域では「オキカゼ」、西部から南部にかけての地域では「ナミカゼ」と呼ばれ、共に海（沖）からの風という意味とみられる。

また、加太地区や坂下地区から明地区、昼生地区等ではよく吹く西風に対する逆方向の風ということから「ウラカゼ」という呼び方もみられた。

ウ その他

併せて行った天候に関する伝承・諺の調査において、「ナミカゼ（又は オキカゼ）が吹くと雨」等、東風と雨との関係を示す伝承等を郡内全域で採録した。



2) 冬の北西季節風（鈴鹿おろし）

ア 採録した呼び方

- a 季節風一般 カラカゼ（：空風）、カラッカゼ（：空風）、ヤマオロシ（：山おろし）
- b 特に（寒気が）強い季節風 カラカラカンジ、カラカンジ、カラッカンジ
- c 雪を伴う季節風 ユキオコシ（：雪起こし）、ユキオコシノカゼ（：雪起こしの風）
- d その他の季節風
 - ・ 地域の山の名等に由来する風 カブトオロシ（：加太おろし）、シャクトオロシ（：錫とおろし）、スズカオロシ（：鈴鹿おろし）、セキオロシ（：関おろし）、ニュードウオロシ（：入道おろし）、ノノボリオロシ（：野登おろし）、ハグロオロシ（：羽黒おろし）、フジオロシ（：富士おろし）、ミョウジョウオロシ（：明星おろし）
 - ・ 滋賀県（江州）からの風 ゴウシュウオロシ（：江州おろし）、ゴウシュウカゼ（：江州風）
 - ・ 真北方向からの風 キタオロシ（：北おろし）
 - ・ 田村神社の厄除大祭時（2月17日～19日）頃に吹く寒冷な風 タムラカゼ（：田村風）

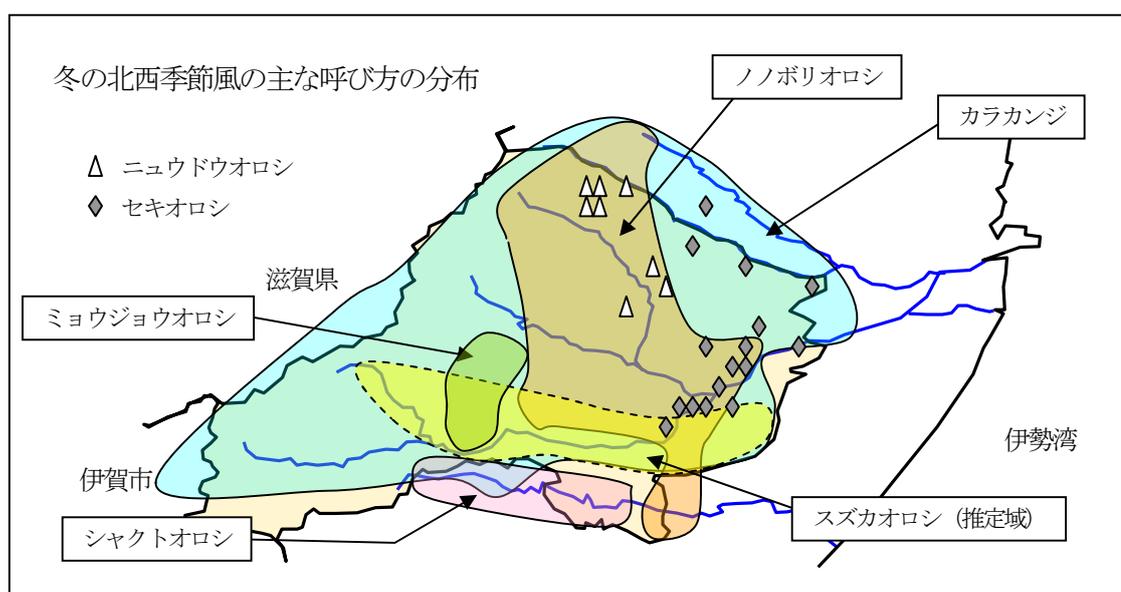
イ 呼び方とその状況

冬の北西季節風の呼び方としては、「カラカゼ」や「カラカンジ」をはじめ計21種を採録した。

現在、三重県北勢地域において広く「鈴鹿おろし」と呼ばれる寒冷な北西季節風は、郡内全域で「カラ（ッ）カゼ」や「ヤマオロシ」と呼ばれたほか、雪が伴う場合には「ユキオコシノカゼ」、また、中でもとりわけ強風となる寒冷な季節風は昼生地区等一部を除き、広域で「カラカンジ」と呼ばれた。

一方、風上となった山並みから吹き下ろす風として、地域や集落によって「ノノボリオロシ」、「ミョウジョウオロシ」、「シャクトオロシ」等山の名に「オロシ」をつけて呼ばれたほか、風上の地域名から「セキオロシ」、「カブトオロシ」、近江地域から吹いてくる風として「ゴウシュウカゼ」、また、田村神社（甲賀市土山町）の祭りの時期に吹く寒冷な風として「タムラカゼ」が見られた。

なお、「鈴鹿おろし」については、明治時代から大正時代にかけて、滋賀県との県境となった山並みの名称が「鈴鹿山脈」と定められて以降に北勢全域に広まったようで、「鈴鹿山（スズカヤマ等）」と呼ばれた山並みの位置や郡内における他のオロシの呼び方の分布等の聴き取り結果からも、かつては鈴鹿峠付近の山々からその谷沿いに吹き下ろす風を指す言葉として、坂下地区から東側に連なる限定的な地域でのみ使われた呼び方であったものとみられる。



※ 「鈴鹿山脈」という名称が印刷物に登場するのは、地図では昭和5年発行の「新選詳図（帝國書院）」であり、「三重県統計書」では昭和24年版以降である。

3) つむじ風

ア 採録した呼び方

- ・ 回ること マイカゼ (:舞い風)、マワシカゼ (:回し風)
- ・ 一般的な和名 ツムジカゼ (:つむじ風)
- ・ その他 アラカゼ (:荒風)

イ 呼び方とその状況

つむじ風の呼び方としては、「マイカゼ」や「マワシカゼ」をはじめ計4種を採録した。

郡内のほぼ全域で「マイカゼ」と呼ばれたほか、広い地域で「マワシカゼ」とも呼ばれ、また、白川地区から神辺地区、明地区では「アラカゼ」もみられた。

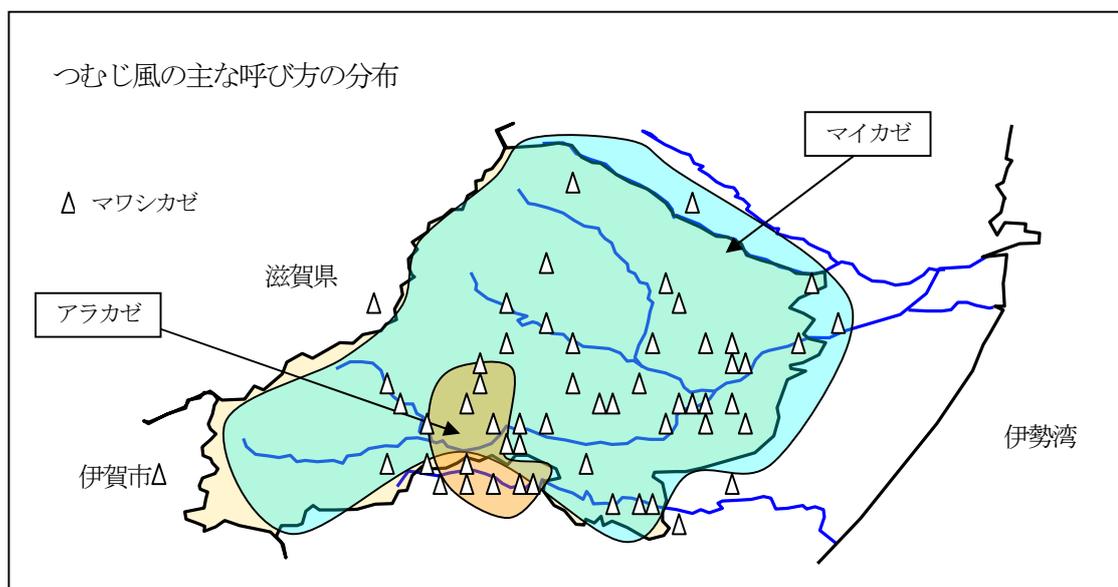
主たる呼び方としては、郡内のほぼ全域で「マイカゼ」が使われたほか、関町地区、白川地区、神辺地区及び野登地区においては「マワシカゼ」も同様に使われたようであり、その他、一部に「アラカゼ」がみられた。また、一般的な「ツムジカゼ」も採録したが、郡域では主たる呼び方ではなかった。

なお、隣接地域として調査を行った山内地区(旧甲賀郡)や柘植町(旧阿山郡)では「ツムジカゼ」や「マワシカゼ」を採録した。

ウ その他

聴き取りから、近年は見かけることは少ないようであるが、昔はつむじ風がよく見られたという。

なお、調査対象としなかったが、規模の大きいつむじ風は現在と同様に「タツマキ(:竜巻)」と呼ばれ、昭和20年9月頃に当時の川崎村の中の山から太田(現太森町太田)にかけてそれが通り、数軒の家が大きな被害を受けたという話を亀山市太森町で採録するとともに、それと近い時期の竜巻の話が鈴鹿市広瀬町でみられた。



4) 台風

ア 採録した呼び方

- a 一般 アラシ (:嵐)、オオアラシ (:大嵐)、オオカゼ (:大風)
- b 通過後の風 オクリカゼ (:送り風)、カエシ (:返し)、カエシカゼ (:返し風)、フキカエシ (:吹き返し)、フキモドシ (:吹き戻し)、モドシ (:戻し)、モドシカゼ (:戻し風)
- c 迎え風 (北東風) ウシトラノカゼ (:丑寅の風)

イ 呼び方とその状況

台風の呼び方としては、「アラシ」や「オオアラシ」をはじめ計3種を採録した。

郡内全域で主として「アラシ」と呼ばれたほか、「オオアラシ」や「オオカゼ」と言う場合もみられた。現在よく使われる「台風」は天気予報で使われ、大戦後になって「アラシ」に替わる言葉として一般化したという。

台風の通過後に吹く風としては、「フキモドシ」や「カエシカゼ」をはじめ計7種を採録した。

郡内の広い地域で「カエシ」や「フキカエシ」と呼ばれたほか、「カエシカゼ」、「モドシカゼ」等とも呼ばれ、また、加太地区では「オクリカゼ」がみられた。なお、隣接地域として調査を行った山内地区 (旧甲賀郡) では「ニシガエシ」を採録した。

また、一連の聴き取りの中で、台風の迎え風としての北東風について、その吹いてくる方向から「ウシトラノカゼ」を3集落で採録した。

ウ その他

併せて行った天候等に関する伝承・諺の調査において、「210日、220日は厄日」等と言われ、そうした日が台風の来る厄日とされたとともに、「嵐は吹き返しが一番怖い」、「かえしがきつくと田が白穂になる」等、台風の通過後の強風についての伝承等を多くの集落で採録した。



5) その他

ア 採録した呼び方

- ・ トミタコゾウ (:富田小僧 : 四日市市富田方向から吹く北東風)

イ 呼び方と状況

調査対象とはしなかったが、一連の聴き取りの中で北東風として「トミタコゾウ」を採録した。

四日市市富田方向から吹いてくる北東風が、鹿間町・下大久保町及び南小松町で「トミタコゾウ」と呼ばれた。

③ 雨と光

1) 長雨

ア 採録した呼び方

a 春の長雨 (3月～4月) ナタネジメリ (:菜種
湿り)、ナタネヅユ (:菜種梅雨)

b 梅雨 (6月～7月) セツ

※ 併せて採録した梅雨に関係した呼び方

- ・ 少し早い梅雨のような雨 ハシリヅユ (:走
り梅雨)、ツユノハシリ (:梅雨の走り)
- ・ 梅雨入り セツノイリ (:せつの入り)
- ・ 梅雨明け セツアキ (:せつ明き)、セツア
ケ (:せつ明け)、セツノアケ (:せつの明
け)、セツノオワリ (:せつの終わり)
- ・ 梅雨明け後の長雨 モドリヅユ (:戻り梅雨)

c 秋の長雨 (9月～10月) アキサメ (:秋雨)

d 晩秋の長雨 バンシュウヅユ (:晩秋梅雨)

イ 呼び方とその状況

春の長雨 (3月～4月) の呼び方としては、「ナタネジメリ」と「ナタネヅユ」の計2種を採録し、郡内全域で「ナタネヅユ」と呼ばれた。

梅雨 (6月～7月) の呼び方としては、「セツ」の1種を採録し、郡内全域で「セツ」と呼ばれた。なお、一連の聴き取りの中で関連して、梅雨に入ることを「セツノイリ」、梅雨の終わりとして「セツアケ」等を採録した。また、梅雨時期に少し先立つ雨を「ハシリヅユ」や梅雨明け後の梅雨のような天気として「ツユノモドリ」を採録したが、当時に郡域でよく使われた言葉ではなかったという。

秋の長雨 (9月～10月) の呼び方としては、「アキサメ」の1種を採録し、郡内全域で「アキサメ」と呼ばれた。

晩秋の長雨の呼び方としては、「バンシュウヅユ」の1種を採録したが、約10集落でのみ採録し、郡内ではよく使われた言葉ではなかったようである。



2) 夏の断続的な雨

ア 採録した呼び方

・ 一般 ナガシ (:ながし)、ナガセ (:ながせ)、ナガセアメ (:ながせ雨)、ナガセン (:
ながせん)

・ 土用の時期 ドヨウナガセ (:土用ながせ)

・ 盆の時期 ボンナガセ (:盆ながせ)

イ 呼び方とその状況

梅雨明け後の夏の断続的な雨の呼び方としては、「ナガセ」や「ボンナガセ」をはじめ計6種を採録した。

郡内全域で「ナガセ」と呼ばれたほか、雨の時期が土用の場合は「ドヨウナガセ」、盆の場合は「ボンナガセ」とも呼ばれた。

なお、「ナガセ」は、夏に断続的に続く雨、夏の長雨、夏の夕立のような雨、台風の前触れとなる8月から9月初め頃の雨を指す場合等があるようで、集落や人によって意味する内容に若干の違いが見られた。

ウ その他

併せて行った天候等に関する伝承・諺の調査において、「ながせ七日」、「ながせ (又は 夏の雨) が続くと米上がりが悪い」等、夏の長雨を示す伝承等を多くの集落で採録した。

3) 彼岸の雨

ア 採録した呼び方

- ・ ヒガンツブシ (:彼岸つぶし)、ヒガンツブレ (:彼岸つぶれ)、ヒガンツユ (:彼岸梅雨)、ヒガンノアメ (:彼岸の雨)、ヒガンノアレ (:彼岸の荒れ)、ヒガンノナガブリ (:彼岸の長降り)、ヒガンブリ (:彼岸降り)

イ 呼び方とその状況

彼岸の雨の呼び方としては、「ヒガンブリ」や「ヒガンツユ」をはじめ計7種を採録した。郡内の広い地域で「ヒガンブリ」と呼ばれたほか、採録集落数として少ないながらも広域で「ヒガンツユ」が、また、国府地区周辺で「ヒガンツブレ」がみられた。

4) 一時的な雨 (にわか雨・夕立)

ア 採録した呼び方

a 一時的な雨

- ・ 一般 トオリアメ (:通り雨)、ニワカアメ (:にわか雨)、ハシリアメ (:走り雨)、ユウダチ (:夕立)、ワタリアメ (:渡り雨)
- ・ 素早く来る雨等 ハヤダチ (:はやだち)、ハヤテ (:はやて)

b 朝の雨 アサアメ (:朝雨)、アサダチ (:朝立)、アサブリ (:朝降り)、アサユウダチ (:朝夕立)

c 秋・冬の雨 シグレ (:時雨れ)

イ 呼び方とその状況

一時的な雨の呼び方としては、「ユウダチ」や「ハヤテ」をはじめ計12種を採録した。一時的な雨は、一般的には郡内全域で「ユウダチ」や「ニワカアメ」、「トオリアメ」と呼ばれたほか、小社町で「ワタリアメ」とも呼ばれた。素早く来たり、雷を伴ったり等する一時的な雨は、加太地区を除き郡中部・東部を中心に広く「ハヤテ」と呼ばれた。また、朝に降る一時的な雨は、郡内のほぼ全域で「アサユウダチ」、「アサダチ」等とも呼ばれ、「ユウダチ」と区分けをする場合がみられた。一方、秋や冬に降る一時的な雨は、現在と同様に「シグレ」と広く呼ばれた。

5) 日照雨 (日差しがある中での雨)

ア 採録した呼び方

- ・ キツネノヨメイリ (:狐の嫁入り)

イ 呼び方とその状況

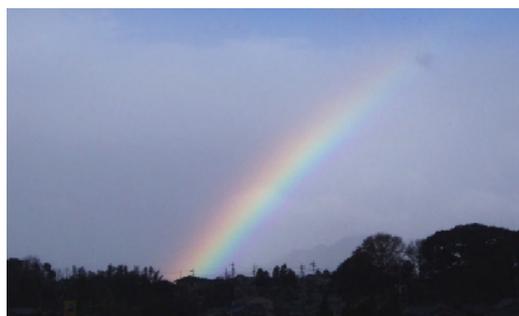
日差しがある中で雨が降る日照雨の呼び方としては、「キツネノヨメイリ」の1種を採録した。郡内全域で「キツネノヨメイリ」と呼ばれ、他の呼び方はみられなかった。

なお、集落によっては、日照雨が午前中の場合や虹が出た場合にのみそのように言ったという。

ウ その他

日照雨では虹がしばしば見られることから、「虹を渡ってキツネが嫁入りをする」という話がいくつかの集落でみられた。

なお、虹は郡内全域で「ニジ」と呼ばれ、他の呼び方はみられなかったが、併せて行った天候に関する伝承・諺の調査において、その後の天気と関係して「アメニジ (:雨虹)」と「ハレニジ (:晴虹)」、また発生時刻に関して「アサニジ (:朝虹)」と「ユウニジ (:夕虹)」の計4種を採録した。



6) 雷

ア 採録した呼び方

- a 一般 カミナリ (:雷)、カミナリサン (:雷さん)
- b 子ども向け ゴロ、ゴロゴロ、ゴロゴロサン、ゴロサン

※ 天候に関する伝承・諺の調査で採録した呼び方

- ・ アサガミナリ (:朝雷=朝に鳴る雷)
- ・ ユウガミナリ (:夕雷=夕方鳴る雷)
- ・ カンガミナリ (:寒雷=寒の時期に鳴る雷)
- ・ オオガミナリ (:大雷=大きな音の雷)
- ・ カラカミナリ (:空雷)・ヒガミナリ (:日雷=雨を伴わない雷)
- ・ ノボリガミナリ (:のぼり雷)・ナリアガリ (:鳴り上がり=東から来る雷)
- ・ クダリガミナリ (:くだり雷)・ナリサガリ (:鳴り下がり=東に行く雷)
- ・ オキガミナリ (:沖雷=沖(東)で鳴る雷)
- ・ キタガミナリ (:北雷)・キタナリ (:北鳴り=北で鳴る雷)
- ・ カブトガミナリ (:加太雷)・カブトナリ (:加太鳴り=加太の方向で鳴る雷)
- ・ シナノガミナリ (:信濃雷=信濃の方向で鳴る雷)



イ 呼び方とその状況

雷の呼び方としては、「カミナリ」と「カミナリサン」の計2種を採録するとともに、子ども向けの呼び方としては、「ゴロ」や「ゴロサン」をはじめ計4種を採録した。

郡内全域で「カミナリ」又は「カミナリサン」と呼ばれたほか、子ども向けには郡内全域でその音から「ゴロゴロ」、「ゴロサン」等と呼ばれた。

その他、併せて行った天候に関する伝承・諺の調査において、「アサガミナリ (:朝雷)」、「カラカミナリ (:空雷)」、「キタガミナリ (:北雷)」等の時間や様態、鳴る方向等と関係した呼び方を計16種採録した。

ウ その他

聴き取りから、昔の年寄りには雷が鳴り始めると子ども達によく「ゴロゴロサンがへそを取りに来るぞ」等と言い、家で大人しくしているよう戒めたという話や「麻の蚊帳の中に入れ」と言ったという話をはじめ、雷に関して多くの伝承等が郡内全域でみられた。

7) 稲光

ア 採録した呼び方

- ・ イナヅマ (:稲妻)、イナビカリ (:稲光)、ヒカリ (:光)

イ 呼び方とその状況

空を引き裂くように見られる雷の稲光の呼び方としては、「イナビカリ」や「イナヅマ」をはじめ計3種を採録した。

郡内全域で主として「イナビカリ」と呼ばれたほか、久間田地区の集落では人により「イナヅマ」が主たる呼び方として使われた場合がみられた。

ウ その他

郡内全域で両呼び方が見られたため、主たる呼び方について聴き取りをした。

④ 氷、霜等

1) 氷柱 (ツララ)

ア 採録した呼び方

- a 一般 カナボー、カナンボ、カナンボー、カナンポ、カナンポン、カナチンボ、カランボ、カランポ、カランポン、ツロロ、カナコリ (通常の氷との混称)

- b 複数あり連なった状態 ツヅラ

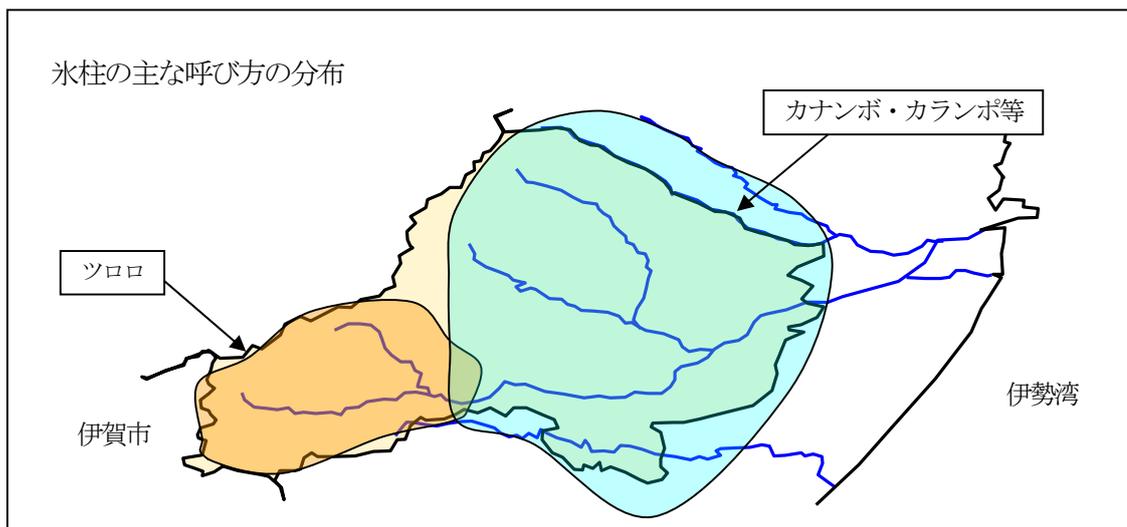
イ 呼び方とその状況

氷柱の呼び方としては、「カナンボ」や「ツロロ」をはじめ計12種を採録した。

郡内の広い地域で「カナンボ」、「カランボ」等と呼ばれたほか、加太地区から関町地区にかけては「ツロロ」と呼ばれ、また、集落によっては池等に張った氷の呼び方である「カナコリ」と呼ぶ場合もみられた。

一方、氷柱が幾つか連なった状態のものは、ほぼ全域で「ツヅラ」とも呼ばれた。

なお、隣接地域として調査を行った山内地区 (旧甲賀郡) や柘植町 (旧阿山郡) では「ツララ」、関町福德 (旧河芸郡) 及び萩原 (同) では「ツンツロ」、芸濃町楠原 (同) では「チロリン」を採録した。



2) 池等に張った氷

ア 採録した呼び方

- ・カナコオリ、カナゴオリ、カナコリ、カネコリ

イ 呼び方とその状況

池の水面等に張った氷の呼び方としては、「カナコリ」や「カナコオリ」をはじめ計4種を採録した。

郡内の広い地域で「カナコリ」と呼ばれたほか、加太地域では「カネコリ」と呼ばれ、また、集落や人によっては「カナコオリ」や「カナゴオリ」と伸ばして呼ぶ場合がみられた。

なお、隣接地域として調査を行った柘植町 (旧阿山郡) では「カンコリ」、山内地区 (旧甲賀郡) では「カネコオリ」、「カネコリ」を採録した。

3) 霜柱

ア 採録した呼び方

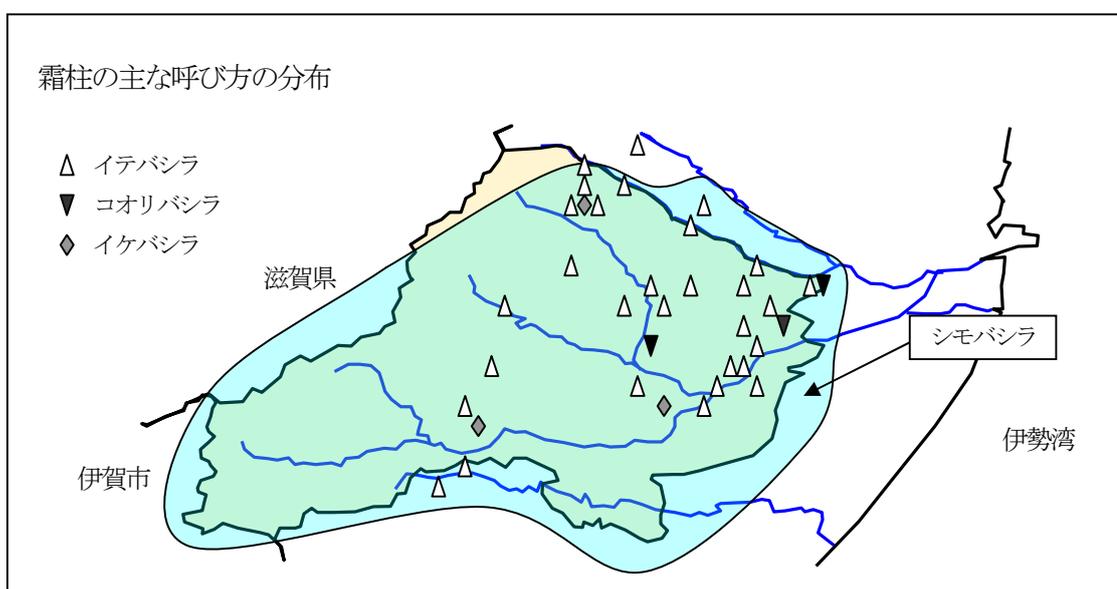
- ・ 一般 イキバシラ、イケバシラ、イテバシラ (:凍て柱)、コオリバシラ (:氷柱)、シモバシラ (:霜柱)
- ・ その他 ジャリガアガル (:砂利が上がる)

イ 呼び方とその状況

霜柱の呼び方としては、「イテバシラ」や「シモバシラ」をはじめ計6種を採録した。

郡内のほぼ全域で「シモバシラ」と呼ばれたほか、郡東部から北部にかけての地域を中心として「イテバシラ」とも呼ばれ、また、集落によっては「イケバシラ」、「コオリバシラ」と呼ぶ場合がみられた。

その他、鈴鹿市津賀町では「ジャリガアガル」を採録した。



4) 霜や霜柱が早く融けること

ア 採録した呼び方

- ・ シモオレ (:霜折れ)、シモゴレ (:霜ごれ)、シモダオレ (:霜倒れ)、シモボレ (:霜ぼれ)、シモレ (:霜れ)

イ 呼び方とその状況

霜や霜柱が早く融けることの呼び方としては、「シモオレ」や「シモレ」をはじめ計5種を採録した。

郡内の広い地域で「シモオレ」又は「シモレ」と呼ばれたほか、深伊沢地区では「シモゴレ」と呼ばれた。また、そうした状態となることを「シモオレスル」、「シモレル」などと言った。

ウ その他

併せて行った天候に関する伝承・諺の調査において、「シモオレする (又は シモレル) と天気が崩れる」等、霜や霜柱が早く融けると天気が崩れることを示す伝承等を郡内全域で採録するとともに、大霜など霜が多い場合との関係を示すものもみられた。

⑤ 山、川等

1) 鈴鹿山脈

ア 採録した呼び方

- ・ 鈴鹿山脈 ニシノヤマ（：西の山）、ニシヤマ（：西山）、
- ・ 鈴鹿峠付近の山並み スズカサン（：鈴鹿さん）、スズカヤマ（：鈴鹿山）
- ・ その他 ヨコネ（：よこね）

イ 呼び方とその状況

鈴鹿山脈（一部の集落では布引山地を含む。）の呼び方としては、「ニシノヤマ」と「ニシヤマ」の計2種を採録した。

各集落から見て西側に位置し南北に連なる山並みであることから、郡内のほぼ全域で「ニシノヤマ」と呼ばれた。

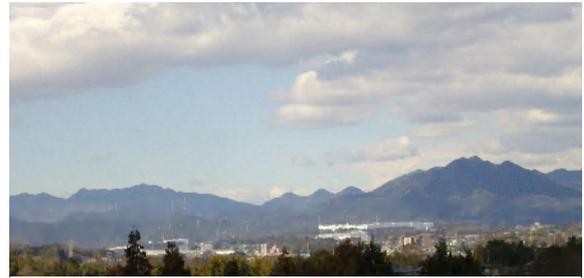
また、鈴鹿峠付近の山並みが坂下地区から神辺地区付近にかけて「スズカヤマ」、「スズカサン」と呼ばれ、また、麓に位置し山並みが遠近で一望できる場所にある安坂山町坂本では「ヨコネ」がみられた。

それ以外は「ノノボリサン」、「ミョウジョウガタケ」、「ニュードウサン」等固有の山の呼び方で呼ばれ、山並み全体を表す呼び方はみられなかったが、そうした呼び方自体が「スズカヤマ」と同様に周囲の山並みを含めて表す呼び方としても使われていたようである。

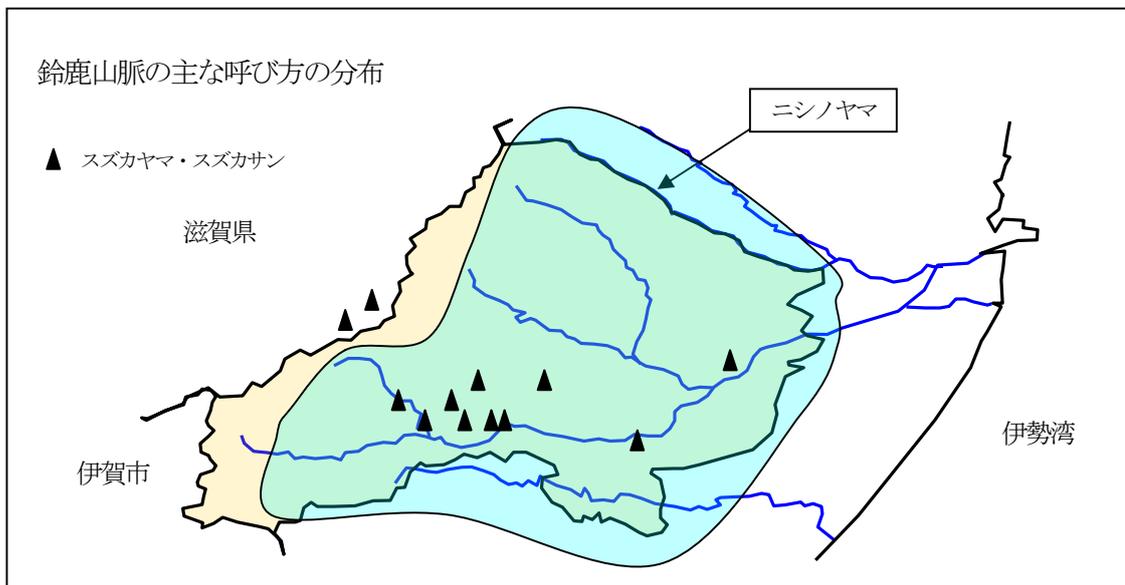
なお、隣接地域として調査を行った山内地区（旧甲賀郡）では「スズカサン」を採録した。

ウ その他

三重県と滋賀県の境界となる山並みが、明治時代から大正時代にかけて「鈴鹿山脈」という名称に定められたようで、その名称が記載された最も古い地図とみられるのは、昭和5年発行の「新選詳図（帝国書院）」であり（国土地理院の地図では昭和21年発行図より明記）、また、三重県の統計文書上では昭和24年版の「三重県統計書」以降と新しい。



鈴鹿峠・三子山付近



2) 地域の川（鈴鹿川、中ノ川）

ア 採録した呼び方（現在と異なる呼び方のみ）

a 鈴鹿川水系

ア) 本流

- ・ 鈴鹿川（上流部） ヤソセガワ（：八十瀬川）
- ・ 坂下～加太川との合流点 サカシタガワ（：坂下川）
- ・ 関～庄野付近 セキガワ（：関川）
- ・ 庄野～河曲付近 カイガワ（：甲斐川）

イ) 支流・細川

- ・ 加太川 ヤマトガワ（：大和川）
- ・ 国府町西之城戸～菅内町を流れる細川 サカゲ、サカサマガワ（：逆さま川）
- ・ 亀椿川 ベンテンガワ（：弁天川）、ウラカワ（：裏川）、オサンダノカワ
- ・ 安楽川 ハライガワ（：祓い川＝安坂山町坂本の東の川）、ナナマガリ（：七曲り＝池山～両尾間）、サカサマガワ（：逆さま川＝安坂山町安楽の湾曲部）
- ・ 芥川 ショウテンガワ（：聖天川）
- ・ 浪瀬川 キタガワ（：北川）

b 中ノ川水系

- ・ 中ノ川 タナイケガワ（：種池川）

イ 呼び方とその状況

鈴鹿川の呼び方としては、本川では「セキガワ」や「カイガワ」をはじめ計4種を採録した。

鈴鹿川本川は、万葉集由来の呼び方である「ヤソセガワ」が一部にみられたほか、加太川との合流地点までが「サカシタガワ」、合流地点から庄野付近までが「セキガワ」、その下流部では「カイガワ」と呼ばれた。また、古い文献にはさらに下流部で「タカオカガワ」という呼び方もあるという。

支流にあつては、加太川の呼び方として「ヤマトガワ」、また安楽川では野登地区の一部の区間の呼び方として「ナナマガリ」、「サカサマガワ」を採録した。

中ノ川の呼び方としては、「タナイケガワ」の1種を採録したが、当時以前から「ナカノガワ」と呼ばれていたものとみられる。

ウ その他

「鈴鹿川」と「中ノ川」が公文書上に現れるのは明治11年版以降の「三重県統計書」であり、また、「鈴鹿川」は、大正6年に当時の河川法準用河川認定の三重県告示がされている。



3) 天候を判断する山等

ア 晴雨の判断

a 判断の状況

本調査とともに併せて行った天候に関する伝承・諺の調査から、郡内の平野部にあるほとんどの集落では、主としてその西側に位置する「ニシノヤマ（：西の山）」と呼ばれた鈴鹿山脈や近くにある目立つ山にかかる雲の状況等により天候の判断がされていた。



錫杖ヶ岳とほえみそ

一方、鈴鹿山脈の麓に位置し東側が開けた集落では、主として東（海の方角）の空における雲の状況等により天候の判断がされ、また、山間部など山に囲まれた集落では周囲の主だった山にかかる雲の状況等により判断されていた。

なお、隣接地域として調査を行った土山町（旧甲賀郡）や柘植町（旧阿山郡）の集落では、主として東側に位置する鈴鹿山脈等の山にかかる雲の状況等により天候の判断がされていた。

b 地域別の状況

地域	見る方向	判断をする山等
郡内平野部の集落	西方向	鈴鹿山脈、近くの目立つ山
郡内山辺の集落、山内地区、東柘植地区	東方向	鈴鹿山脈、東の空（又は山）
郡内の山間の集落	周囲	近くの主だった山

※ 近くの目立つ（又は、主だった）山（例） 野登山、雨引山、三子山、錫杖ヶ岳等

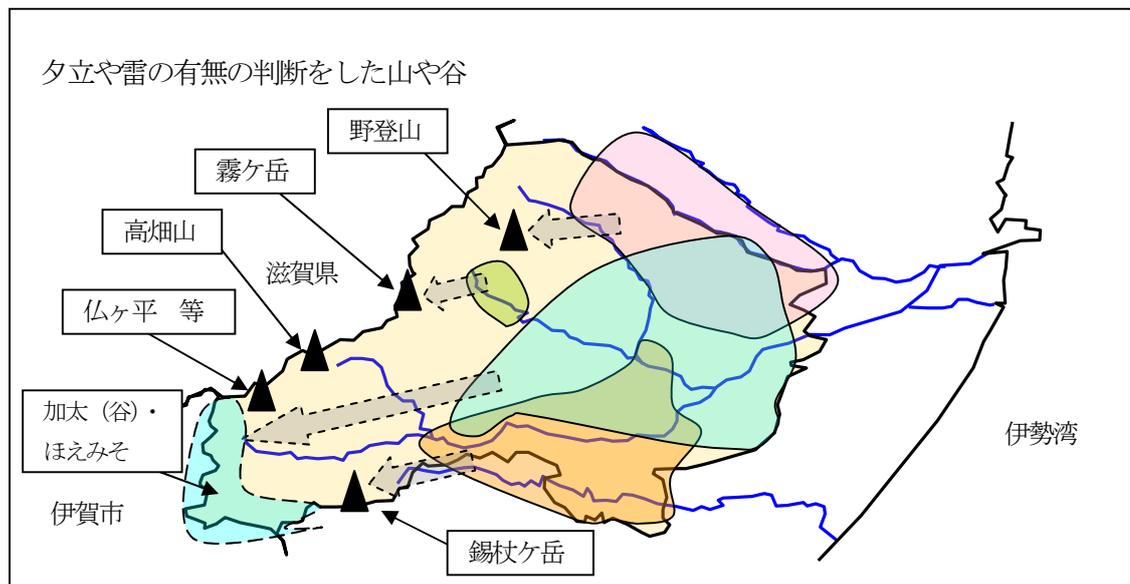
イ 夕立や雷の有無の判断

a 判断の状況

本調査とともに併せて行った天候に関する伝承・諺の調査から、郡内の平野部にあるほとんどの集落では、鈴鹿山脈や布引山地の方向の空に黒い雲（入道雲）が現れた場合、その場所により夕立や雷の有無についての判断がされていた。

b その他

集落毎に、概ね南西方向に夕立や雷が必ず来るとされる黒い雲の現れる場所があり、それを示す伝承等とともに、当時の嫁が一時帰郷した実家からの手土産としてよく持参したポタモチとを関係づけ、共に必ず来るものという伝承等が多くの集落においてみられた。



4) 雨乞いをした所

ア 採録した場所

a 近くの寺社

- ・ 神社 (宮さん)、寺

b 他の施設・広場

- ・ 旧小学校、津賀池の下、東海道、公民館

c 山 (山の高い所に設置の寺社を含む。)

- ・ 集落近く 近くの小高い場所
- ・ 謂れのある山 雨引山 (:アマビキヤマ)、石尾山 (:イシオヤマ)、観音山 (:カンノンサン)、経塚 (:キョウヅカ)、庚申山 (:コウシンヤマ)、明星山国分寺 (虚空蔵さん=明星ヶ岳)、シャクガオキ、錫と山 (:シャクトヤマ=錫杖ヶ岳)、入道山 (:ニュウドウサン=入道ヶ岳)、野登山 (:ノノボリサン)、羽黒山 (:ハグロヤマ)



野登山

イ 採録場所の状況

当時又はそれ以前に雨乞いが行われた場所としては、平野部の多くの集落では「宮さん」と呼ばれた各地域の神社が最も多く、その他、寺、学校等の人寄りができる場所で行われた。

山辺の集落では昔から天候に関して謂れのある近くの山に登り、その頂上等 (場所によっては山中に設けられた寺社) で雨乞いが行われた。

こうした雨乞いは、多度神社、片山神社 (関町坂下) 等、当時、雨乞いで有名な神社でお札等を受け、集落へ持ち帰り、近くの神社等でお祀りしたともいう。

なお、水に恵まれた地域では雨乞いを行っていないという集落もみられた。

5) 湧水

ア 採録した呼び方

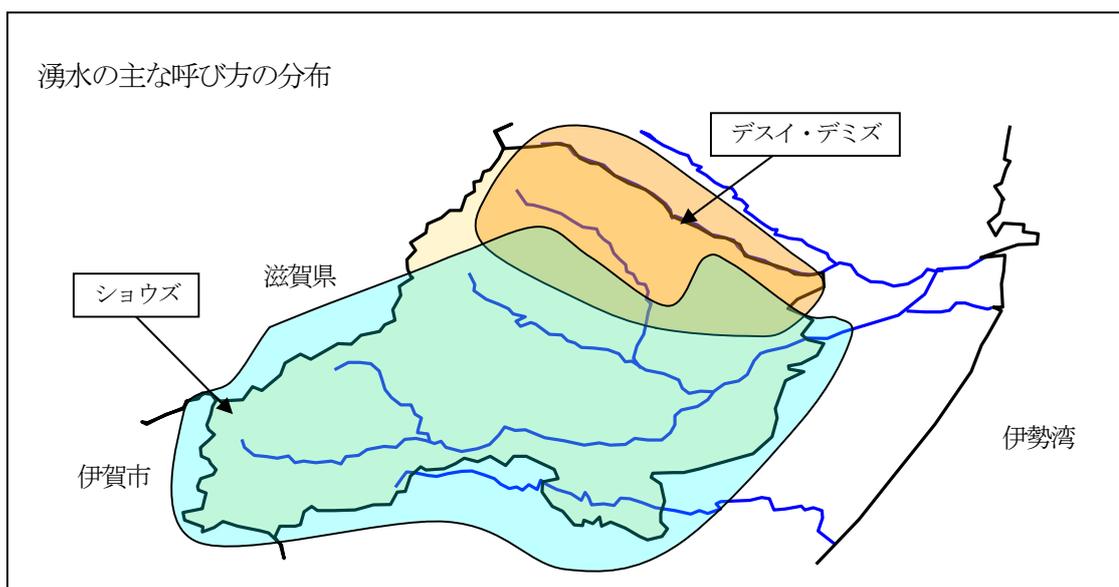
- ・ ショウズ、ショウズイ、デスイ、デミズ

イ 呼び方とその状況

湧水の呼び方としては、「ショウズ」や「デスイ」をはじめ計4種を採録した。

郡内の広い地域で「ショウズ」と呼ばれたほか、郡北東部の地域では「デスイ」、「デミズ」等と呼ばれた。

なお、隣接地域として調査を行った四日市市山田町 (旧三重郡) 及び水沢町 (同) では「デミズ」を、他の集落では「ショウズ」を採録した。



⑥ その他

1) 夏至

ア 採録した呼び方

- ・ セツノチュウ、セツノチュウニチ、セツノチュウニチサン、セツノチュウノヒ、チュウ、チュウノヒ（：せつの中日さん 等）

イ 呼び方とその状況

夏至の呼び方としては、「セツノチュウニチサン」や「チュウ」をはじめ計6種を採録した。郡内のほぼ全域で「セツノチュウニチサン」、「チュウ」、「チュウノヒ」等と呼ばれ、すべての呼び方が「梅雨の中日」という意味である。

ウ その他

併せて行った天候等に関する伝承・諺の調査において、夏至前後の田植えを「チュウタウエ」と呼ぶとともに、「ちゅうの日に稲を植えるとかけまた（＝穂の枝分かれ）が多い」等、田植えに好適な時期を示す伝承等を採録し、当時はその時期に田植えが行われたという。

なお、春分の日や秋分の日については、「ヒガンノチュウニチサン（：彼岸の中日さん）」と呼ばれる一方、冬至については他の呼び方は見られなかった。

2) 土用

ア 採録した呼び方

- ・ 土用の初日 ドヨウノイリ（：土用の入り）
- ・ 土用の二日目 ドヨウジロウ（：土用次郎）
- ・ 土用の三日目 ドヨウサブロウ（：土用三郎）
- ・ 土用の五日目 ドヨウゴロウ（：土用五郎）

イ 呼び方とその状況

土用に関係した日の呼び方としては、「ドヨウノイリ」や「ドヨウサブロウ」をはじめ計4種を採録した。

土用の初日は郡内全域で「ドヨウノイリ」と呼ばれたほか、土用の三日目が郡内の広い地域で「ドヨウサブロウ」と呼ばれた。また、土用の二日目として「ドヨウジロウ」、土用の五日目として「ドヨウゴロウ」が一部の集落で見られた。

ウ その他

聴き取りから、土用には土用干し、虫干しが行われたという話とともに、カイコがマユを作る時期であったり、杭打ちを避けた時期であったという話が見られた。

なお、全国的な諺のひとつである「彼岸太郎、八専次郎、土用三郎に寒四郎（＝彼岸の初日、八専の二日目、土用の三日目、大寒の4日目が晴れならば、それらの期間中は晴れが多く、雨ならば雨が多い）」について、郡内においてもそうした伝承があるのかという観点で聴き取りを行ったが、土用に関する表現以外はみられなかった。

